

■ 編集だより

編集後記

編集委員会では、会員の先生方に学会誌を気軽に手にとっていただき、それでいて有益な情報を提供できるように腐心している。その中で、「関連学会のトピックス」と「書評」の欄を新設することになった。関連学会へは、学術集会などの活動を含めた紹介記事の執筆依頼をはじめたところである。書評は本年1号から掲載している。理事会では「学会がお墨付きを与えたようになりはしないか」「取り上げられなかった著者から抗議がくるのではないか」などの心配の声があがったが、そこは会員の先生方の見識の高さを考えれば杞憂であろうということになった。ただ、14000人の精神科医が定期的に読む雑誌という重みを考慮し、その選考は編集委員会で討議をして決定し、その本に興味をもつ編集委員が書評を書きその内容を委員会承認を得るという手続きを踏むことになった。「古典も取り上げてはどうか」という意見もあったが、当面は新刊のみを取り上げることとなった。重要な古典の書籍については、「会員の声」に投稿していただければ、さまざまな立場からの見方がでて古典にふさわしいと考える。

さて、精神医学以外の本で2010年に読んで興味深かった本を3つ挙げてみたい。

ひとつは柄谷行人著「歴史の構造」(岩波書店)である。互酬、略取と再分配、商品交換の中の支配的な交換様式から、歴史、社会構造(国家、宗教、貨幣、ネーションなど)をとらえ直そうとする試みである。「マルクスの可能性の中心」などでポストモダンの潮流を形成した著者がカントを経て到達した論考である。これからの医療・福祉のあり方を原理的に考察する上でも参考になるであろう。

小説では、古井由吉著「やすらい花」(新潮社)。相反する要素が多様に入り組む心情を長い呼吸の文体で独自の世界を切り開いている著者が、生死のきわ、夢(幻想、幻覚)と現実の狭間を絶妙に表現している。「せん妄」の心的情景にも通じるところがあると感じた。詩を読むような味わいがあるので複雑な心のひだをたどることができる。

美術関係ではカラバッチョ研究の第一人者である宮下規久朗著「ウォーホルの芸術」(光文社)に惹かれた。もともとある図像を繰り返し転写するという手法が、美術史的にはアイコンの復活という意味をもっていたことがわかった。「イラスト」を描くことが好きだという20代までの患者さんが多いが、似たような図像を繰り返し描くことの意味を教えられた。

私的読書体験を書いたが、これは担当した書評の本の中で「読書体験」の重要性が強調されており、触発されたためである。良書に出会うと想像が広がる。当雑誌の書評が会員の先生方の視野を広げる糸口になればと願っている。 細田眞司